

全体討論での発言 石川康宏代表理事

私の住む西宮の革新懇の企画で内田樹さんが「これから日本はどうなるのか」という質問に、「新しい歴史の担い手は思わぬところから出てくるものだ」と答えておられました。直後に、トランプと金正恩の会談が行われたのでびっくりしましたが、みなさんの発言にもあつたように、背後には彼らにあつたような行動をとらせる世界の運動があつたわけですから、北東アジアに非核・平和の共同体をつくることとが単なるスローガンではなく、現実的な足がかりを持つたりアルな課題になっています。そのような情勢にうまくかみ合つて、平和委員会はどういう取り組みを行い、どういう役割をはたすのかということを考えていかねばなりません。



世界各地での息の長い運動が、世界構造を変えてきました。植民地支配を抜け出そう、はもう1世紀におよぶ運動です。大国支配の最大の武器とされた核兵器を禁止

しよう、は第1回の世界大会から60数年になります。戦争の違法化も1928年のパリ不戦条約から90年になります。その時代、その時代には、到底自分たちの力では打ち壊せないだろうと思えた大きな壁を、たくさんの人の力で、時間をかけてつくり変えてきたわけです。その取り組みの蓄積が、現瞬間の大きな変化につながっています。たゆまぬ運動の力に深い確信を持ちましょう。

あわせて、この局面で考えるべきは、北東アジアの平和に向けて、核兵器の禁止から廃絶に向けて、日本社会は何をすべきかを、いかにして国民共通の課題にしていくかということ。今この瞬間に日本の社会と政治はどう動くべきなの。それについてのインパクトのある問題提起が必要。いまのような米国基地国家でいいのか、属国ともいわれる従属的な軍事同盟国家でいいのか、アメリカの核兵器を前提しこれに依存する姿勢でいいのか、核兵器禁止条約に背を向けていいのか、侵略戦争を直視しない歴史をごまかした姿勢のままなのか、目前の課題とあわせて、こうした大きな問題を根っこから問ひかける取り組みが必要になっているのではな

いでしょうか。

これまでの議論の中には、いまの新しい歴史状況にかみあわせて、たくさんの市民との結びつきを広げるためにどういう新しい努力をしているか、という話があまりないように思います。試されずみの運動の積み上げは大切ですが、同時に、状況の変化にあわせて、どういう問題意識をもつてどういう運動に挑戦しているのか、そういう報告はあまりないように思います。

その意味では、議論がある種、内向きで、オタクっぽく、なっているように思います。事柄に精通するという意味では、オタク、的側面は必要です。学者などみなそうした種類の人間です。しかし平和委員会は運動団体です。たくさんの人に主張を理解してもらい、信頼してもらい、互いにつなぐ手を増やしていかなければならない。その点では組織の外に積極的に自らを開いていこうとしない、オタク、ではだめなのです。的確な運動論の探求が必要です。正しいことを言っているのにみんながついて来ないと、問題を市民のせいにするのは運動家ではありません。なぜ振り返つてもられないのかを自己分析し、次の運動のあり方を考えて進むのが運動家です。ここに一層力を入れていく必要があると思います。知恵をあわせていきましょう。